

『キリストが流された涙』 ヨハネ11:17-35

11:17 さて、イエスが行ってごらんになると、ラザロはすでに四日間も墓の中に置かれていた。

11:18 ベタニヤはエルサレムに近く、二十五丁ばかり離れたところにあった。

11:19 大ぜいのユダヤ人が、その兄弟のことで、マルタとマリヤとを慰めようとしてきていた。

11:20 マルタはイエスがこられたと聞いて、出迎えに行ったが、マリヤは家ですわっていた。

11:21 マルタはイエスに言った、「主よ、もしあなたがここにいて下さったなら、わたしの兄弟は死ななかつたでしょう。

11:22 しかし、あなたがどんなことをお願いになっても、神はかなえて下さることを、わたしは今でも存じています」。

11:23 イエスはマルタに言われた、「あなたの兄弟はよみがえるであろう」。

11:24 マルタは言った、「終りの日のよみがえりの時よみがえることは、存じています」。

11:25 イエスは彼女に言われた、「わたしはよみがえりであり、命である。わたしを信じる者は、たとえ死んでも生きる。

11:26 また、生きていて、わたしを信じる者は、いつまでも死なない。あなたはこれを信じるか」。

11:27 マルタはイエスに言った、「主よ、信じます。あなたがこの世にきたるべきキリスト、神の御子であると信じております」。

11:28 マルタはこう言ってから、帰って姉妹のマリヤを呼び、「先生がおいでになって、あなたを呼んでおられます」と小声で言った。

11:29 これを聞いたマリヤはすぐに立ち上がって、イエスのもとに行った。

11:30 イエスはまだ村に、はいつてこられず、マルタがお迎えしたその場所におられた。

11:31 マリヤと一緒に家にいて彼女を慰めていたユダヤ人たちは、マリヤが急いで立ち上がって出て行くのを見て、彼女は墓に泣きに行くのであろうと思い、そのあとからついて行った。

11:32 マリヤは、イエスのおられる所に行ってお目にかかり、その足もとにひれ伏して言った、「主よ、もしあなたがここにいて下さったなら、わたしの兄弟は死ななかつたでしょう」。

11:33 イエスは、彼女が泣き、また、彼女と一緒にきたユダヤ人たちも泣いているのをごらんになり、激しく感動し、また心を騒がせ、そして言われた、

11:34 「彼をどこに置いたのか」。彼らはイエスに言った、「主よ、きて、ごらん下さい」。

11:35 イエスは涙を流された。

●序論

「死を背負って生きる」～いのち看取りの現場から～という本。この中に「病にある方に向き合って心がけたいこと」について、こんな風に語られていました。

「病院で入院すれば、だれもが心が敏感になるものです」と。
先生ご自身が患者となった経験から、看護師に近くに座られて圧迫感を感じたり、遠くに座られて、話しづらさを感じたり、その「距離」に患者は敏感だと記します。
そしてこんな川柳を書いておられます。

「患者には、その日その日の距離がある」。

先生は、その経験から、患者さんとの距離を意識するようになったと言います。
牧師であるわたしも、この「距離」について思い当たることが多くあります。

信仰的と思いながら、ググッと近づいて、無理やりにでも事情を聞き出し祈る。ときにはその逆のこともある。その人の状態に心を向けて「距離」を意識する。もしかしたら大切なことではないかな…と思わされます。

先日召されたともみ先生のお父さんについて、死期が近くあることをだれよりも感じている中で、靈的に敏感になっておられたとわかります。

そこで手を取って祈ることのなかで、改めてイエスさまの言葉をかみしめました。

それは、ラザロのよみがえりという奇跡に結ばれる言葉です。

:40 …「もし信じるなら神の栄光を見るであろうと、あなたに言ったではないか」。

●本論

I. 悲しみを受け止める

イエスさまは、悲しみの現場においでになりました。

それは、ある意味、もうすべて終わってしまったあとの現場でした。

その悲しみの中心に、ラザロの姉妹マルタとマリヤがいました。

そこで彼女たちは、イエスさまが来られたことを聞きました。

その共通した思いを言葉にしています。

:21 …「主よ、もしあなたがここにいて下さったなら、わたしの兄弟は死ななかつたでしょう。」

この言葉に、死んだラザロの姉妹マルタとマリヤの悲痛な、そして無念な思いが表れています。

イエスさまは、彼女たちのその痛みと悲しみと無念の思いの中に立ち、それをご覧になり、それを感じ、そして受けとめておられます。

11:33 イエスは、彼女が泣き、また、彼女と一緒にきたユダヤ人たちも泣いているのをごらんになり、激しく感動し、また心を騒がせ、そして言われた、「彼をどこに置いたのか」。

それは、その悲しみのすべてを受け止め、引き受けるかのようなお姿です。

ご存じのように、イエスさまは、その後すぐラザロを甦らせたのです。

じゃあ、ここでイエスさまが泣いていると言うことになんの意味があるのか…。

それでも、イエスさまはそこにある、姉妹たちが味わっている絶望的な悲しみや悩みの現実の中でともに心をふるわせ、心を痛め涙を流されているということを知っていただきたいのです。

イエスさまは私たちの悲しみや嘆きと遠く離れた方ではないということです。

それがイエスさまが置かれた靈的距離です。

その先に私たちの知らない、神さまのみ業、奇蹟が用意されていることをたとえ知っ

ていようとも、今ここにある悲しみをともに味わい、苦しみ悩み、そして涙を流されるお方であるということを、ぜひ覚えていただきたいのです。

それがキリストの十字架に結ばれます。

のちに、十字架でそのすべての苦しみと悲しみ、孤独と絶望を身代わりに引き受けてくださり、味わわれたのです。

Ⅱ. 命を語られる

イエスさまは、その姉妹マルタに会って最初に語られた言葉はこうでした。

:23)「あなたの兄弟はよみがえるであろう」。

:25-26)「わたしはよみがえりであり、命である。わたしを信じる者は、たといい死んでも生きる。また、生きていて、わたしを信じる者は、いつまでも死なない。あなたはこれを信じるか」。

ここに、死の悲しみのただ中に『命』を語られます。

あのマルタは、「主よ、信じます」と答えはしたけれども、実際には受け止め切れていなかった。それほどに「死」の悲しみは深く、真っ暗闇にしか見えない。その心は閉ざされていたのです。それを喪失感、絶望感というのでしょうか。

そういう悲しみの暗闇の中で、イエスさまは「よみがえり」を語り、「いのち」を語られました。それがイエスさまがくださる命と希望です。

先ほど紹介した本の中で記された。一例「終わりの時の言葉」

72歳の肺がんの患者さんと娘さんの臨終間際の会話。最後まで意識がしっかりあったその方は、浅い呼吸の中から小さな声で、しかしはっきりと「行ってくるね」と言い、娘さんは「行ってらっしゃい」と答えたとあります。

そこには、確かな行先の確信と再会の希望があったということです。

イエス様は、多くの人々の悲しみともっとも絶望的な状況の中で、いのちを語ります。

教会は、先に天に召された人について、永遠のいのちの約束を証しします。

その病床にて、その死の床にて、この命の約束を確信し、またその死ののちにもその命が証しされるという世界が、ここにあるのです。

Ⅲ. 信仰に招かれる

ともみ先生がお父さんとのこれまで振り返って、語られた聖書のことば。

伝道の書3:11 神のなされることは皆その時にかなって美しい。神はまた人の心に永遠を思う思いを授けられた。それでもなお、人は神のなされるわざを初めから終りまで見きわめることはできない。

ともみ先生は、行ききの新幹線の中で、お父さんに洗礼を授けることができるようにと祈ります。神さまが、その数日間の中でのお父さんと、そしてお母さんとの対話の中に働いてくださっていたことを証ししてくださいました。

信仰に導くともみ先生の中に、その状況下で、神さまは、実に先生ご自身を信仰の深みとへと入れてくださったことを、聴きながら思いました。

:26「…あなたはこれを信じるか」。

:41「もし信じるなら神の栄光を見るであろうと、あなたに言ったではないか」。

そしてここに奇跡が起こります。

最後に)

「11:35 イエスは涙を流された。」

キリストが死を前にした人々の悲しみに心を震わせ、人の悲しみと絶望をもたらす死に涙された。だからこそ、自らその死を背負われ、十字架に進んでくださったのです。

そこにイエスさまがご自身がわたしたちの人生に触れてくださる距離感があります。、わたしたちをその死と絶望を超える「いのちと希望」を見ることができるようになってくださったのです。

:40 …「もし信じるなら神の栄光を見るであろうと、あなたに言ったではないか」。

そのよみがえりと命という希望に目を向ける機会をくださる、機会とともに、そのみわざを現してくださるのは、イエス・キリストご自身です。どうか、その希望のもとにわたしたちも「信じるならば」という言葉を受け止め、祈る者となり、また用いていただく者とされていきたいと願います。